

年に至りて轉朝し、爾来大いに台湾の土木界の一世紀元を画せしめき。君が在官にしてよく工学博士の学位を授けらるる。洵(まこと)に偶然にあらざる也。今や民間事業界にあり、隨々如たる君の奮闘と功績を期して待つべし。君、人となり篤学にして最も新進の科学を研究するに力めて勉む所なく、修むるや、直ちに之れを實社会に活用せざれば已まざる底の概あり。實かも異常、謹厳にして操行端正を以て推さる。今や実業界に君土人を要するの時、君が起ちて九州実業界に雄姿を現わす。洵に賀すべき也。令嗣光子は東京の人、川村義男氏の令跡にして貞淑を以て聞こゆ。長男洋一、次男俊二、三男健三、四男喜代四氏の四男ありて、家庭の舊々(あいあい)、宛として奉海の如し。また飲すべき也。(府下豊島郡滝野川町田端五百九十三番地、電話小石川一五〇九番)

○橋尾壽雄 昭和十二年から三年に亘り橋尾郡日一町九村の実態調査したもの

川上浩二郎氏

長岡中学校卒業後第一高等學校を経て東京帝國大学工科に入りて土木方面を専攻す。大学在学中研究心旺盛なる氏は、阪鶴鉄道敷設に従事し實地研究を遂ぐ。卒業後學校共に進み、官事業たる台湾基隆築港の主任技師として招聘され、十数年刻苦精勵の結果これが完成を見る。この間勤任技師となり、政府より歐洲港灣視察として洋行を命ぜらる。明治四十五年七月博士号(工学博士)を授けらる。

台湾にては博士の功績を大いに徳として基隆に銅像を建立せりと聞く。後筑豊線の敷設及び博多湾築港に従事、大いに力量平胸を發揮さる。實に我國港灣研究者の第一人者にして本邦築港界に於ける權威として名を噴々たり。

昭和八年三月死去、享年六十一才。

○日本人名大辞典第二巻 昭和十二年七月平凡社刊

川上浩二郎(一八七三—一九三三)

工学博士、明治六年六月八日新潟県古志郡東谷村に生る。川上喜右衛門の二男。三十一年東京帝大工科大学土木工学科卒業し、農商務技師、台湾總督府技師、臨時基隆築港局技師兼總督府技師を歴任、三十四年印度、右往並びに歐米各国へ差し遣わせられ、三十六年十二月轉朝、四十一年七月臨時台湾總督府工部技師兼台湾總督府技師に任ぜられ、四十二年十月兼官を免じ、同部基隆出張所長に専任せられた。四十五年工学博士の学位を受け、のち官を辞し、博多湾海会社専務取締役就任、財団法人文明協会、同長岡社等の各評議員を兼ねた。昭和八年三月二十九日没。年六十一。従四位勲五等。

○栃尾市史別巻

川上浩二郎(一八七三—一九三三)

工学博士川上浩二郎は市内小向の名門川上家に生まれた。長岡中学、一高を経て東大工

將に入學し、土木工学を専攻した。

台湾基隆築港主任技師を拝命、刻苦精勵十數年にして漸く完成した。明治四十五年、三十才で勲任技師に昇進、港灣視察のため外遊を命ぜられ、帰朝後、鉄道、港灣などの建設をいくつか手懸けた。中でも有名なのが基隆築港である。氏は母校東京小學校で講演し、次のように語っている。

「基隆築港の地点は海がものすごく深く、潮差が急で、誰がやっても処置なしの難工事だった。自分も幾度か失敗を繰り返したが、この工事を完成するのは自分以外には無いという信念で成し遂げた。人間は如何なる苦境に立つとも絶対に自信と責任感を失ってはならぬ」と。

博士に寄せる台湾島民の尊敬と信頼感は一種異様なものがあつたという。

